

成蹊大学教授 西山 隆行先生 受賞コメント

このたびは政治研究櫻田會奨励賞をご授賞くださりまして、ありがとうございます。政治学研究の発展に寄与してこられた櫻田會から賞をいただけることは誠に光栄で、嬉しく思います。

私の書籍『〈犯罪大国アメリカ〉の今』は、そのタイトルから、法律学か社会学の本と誤解されるかもしれません。実際、犯罪問題に関しては、警察組織の行政学的な研究などがありますが、政治学者が本格的に取り組んだ研究書は少なくとも日本では存在しないように思いますので、本書は犯罪問題に関する初の政治学研究書だと思っています。

私がこのテーマに興味を持ち始めたのは、10年以上前に1992年のアメリカ大統領選挙に関する調査をしたことがきっかけです。92年当時、共和党は「リベラルな政治態度が犯罪を誘発するのだ」「リベラル派は犯罪者に対して寛容だ」という批判を繰り返していました。それを受けて民主党のビル・クリントン候補(後の大統領)は、自分は伝統的なリベラル派とは違い犯罪者にタフであると示すべく、当時知事をしていたアーカンソー州に戻り、知的障害が疑われる死刑囚にあえて死刑を執行するというパフォーマンスをしたのです。日本では良いイメージで使われることが多い「リベラル」という言葉が、アメリカにおいては、地域の安全を脅かし犯罪を誘発するものとして政治家によって使われていることに驚き、この点について考察を深めていくことが、アメリカという国をより深く理解することにつながるのではないかと思ったのです。

では、本書がその問題に十分に深く切り込むことができたのかといえば、必ずしもそうとは言えないように思います。犯罪問題についての政治学的な分析は、日本だけでなくアメリカでもほとんどなされていないのが現状です。犯罪問題と政党政治がどのように関わっているのか、犯罪問題と連邦制の関係はどうか、そもそも犯罪問題が政治家や有権者にどのように理解されているのかなどの問題について示唆を与えてくれる先行研究が存在しないなか、手探りで理論化を試みました。

また、広義の犯罪問題と理解されているさまざまな問題——例えば銃規制、麻薬問題、不法移民問題など幅広いテーマ——を統一の枠組みに位置づけることができるかどうか、ということも意識する必要がありました。そして、先行研究がない以上、あえて多くのトピックについて仮説を提示することにより、他の研究者の議論を誘発することが重要だと考えたのです。

このようなことを考えながら作った拙著は、先行研究がないテーマについて後の研究者の踏み台になるという役割を、ある程度果たすことができたのではないかと考えております。櫻田會の奨励賞をいただけたのも、ひよっとするとその点を評価していただいたのかなと思い、まことに嬉しく思っています。

とはいえ、拙著はまだまだ多くの問題点を残しており、完成度が高いとは言えないように思います。より本格的で、社会に有益な研究を行うべくますます精進いたします。今後ともご教導いただけますようお願い申し上げます。